

環

(あい)

光耀抄	4
琥珀集	8
瓊璃集	17
瑪瑙集	29
紅玉集	31
11月号月評	32
惠贈句集拝見 (67)	34
惠贈俳誌拝見 (34)	36
句集「川」共鳴句	38
特別作品「銀杏の四季」	40
琥珀集作品鑑賞	42
瓊璃集作品鑑賞Ⅰ	43
瓊璃集作品鑑賞Ⅱ	44
瑪瑙集紅玉集作品鑑賞	45
俳誌交歓	47
他誌転載	48
妣の国父の蒼天 (57)	50
第9回環本部句会報	52
エッセイ「冷麦の思い出」	54

今月の一句

役場用済みたる杣や栗飯入
桂樟蹊子

(平成二年作)

信州南小谷を訪れ、土地の風土についての資料を役場に貰いに行かれたときの作品である。役場の広場の石に腰を掛け、膝の上に栗ごはんの入った破子の弁当を広げ枝削りの箸で食べている杣姿の男が目に入った。その時貰われた資料には南小谷では破子を飯入と言うと書いてあったという自註がある。情景の良さと栗飯入の置き方の妙が窺われる句である。

隆子

秋の雷

塩路隆子

秋の雷天鼓破るほどの音
耳塚にひと日慟哭つくつくし
訃の家に燥ぎ過ぎです鳳仙花
抱き上ぐる小犬万朶の露まみれ
清貧を信条とせり萩咲かせ
秋すだれ内の平穩ふたり住
ふるさとを丹波といふ児栗弁当

瑞西行（Ⅱ）

塩路隆子

栗鼠走る森林限界夏の雪

夏雲脱ぐ一瞬マッターホルンの威

人馴れのアルペン鴉氷河翔け

雲海に浮かぶさまざま巨峰群

高度二千エーデルワイスふふみ初め

遠景にモンブラン聳つ夏の湖

（俳句界十月号転載）

十一月号光耀抄

塩路 隆子選

遺跡野いま蝉万声に包まれて
鴉いろの秋夕焼や砂金採
大振りの秋刀魚燻らせ炉端焼
みはるかす牧草千里秋あかね
良夜なり児の書架占むる「どらえもん」
中之島をオアシスとして鴉の子
銭湯の窓に実景富士涼し
言はぬが花を忘れてしまふ猛暑かな
百歳の笑顔と握手敬老日
葛の花廃寺の跡に風奔る
燕去ぬ木造駅に巣を残し
獲れとれの金太郎鰯海の色
静かなる湖族の里や白桔梗
ネクタイに手間取つてをり敬老日
聞き流すことも覚えてとろろ汁
蔵茶房上がり框の土間涼し
一茶の里ホームに霧の走りけり
声がして影が近づく夜の秋

大島みよし
川崎 利子
栗倉 昌子
橋本 靖子
鈴木 照子
竹内 悦子
北尾 章郎
森下 康子
塩路 五郎
笠井 清佑
藤見佳楠子
伊藤 純子
坂上 香菜
阪本 哲弘
田中 浅子
辻 知代子
中村 ふく子
西田 史郎

秋灯す昭和レトロの古民家に
 夜の更くる湖畔静かや虫の声
 幻想の霧のベールや新穂高
 新涼の風の囁き窓辺より
 モノクロの軍服写真秋彼岸
 重陽の艦に神馬の像白き
 烏瓜咲きて妖しき闇の夜
 住職の手土産の胡麻香ばしき
 敬老日しゃつきり踊るフラダンス
 乗鞍の雲上にゐて岩桔梗
 轟ける野外演奏闇動く
 秋澄みて新人車掌シャツ青き
 真昼なほ暗き蟬穴古墳跡
 斑鳩の里に残れる暑さかな
 置物めく猫うごき出す秋の雷
 鉄橋の構へ残れる秋の溪
 身の丈の暮しがよけれぬかご飯
 エプロンの木綿きりりと新豆腐
 失業やきりぎりすには長き脚
 唐辛子の赤脳天を直撃す

秦 和子
 増田 一代
 松田 和子
 宮越 久子
 宮田 香
 山口キミコ
 山崎 里美
 横田 矩子
 和田 郁子
 飯田美千子
 井口 淳子
 石川かおり
 落合 晃
 木戸 宏子
 西郷 慶子
 坂根 宏子
 杉本 綾
 和田森早苗
 常田 創
 常田 希望

パラソルの中の女優の澄める肌
 陶枕に寝落ちて寧し母の里
 かなかなに上皇の像都向く
 穂芒に逢ひたく今日も同じ道
 稲光遥かな峰のシルエツト
 遠雷は大津あたりや湖昏み
 冷麦にまぢる天女の紅の糸
 料亭や八寸に置く萩の花
 夏祭の淡き初恋語りぐさ
 処暑のカフェ溢れさうなるカプチーノ
 子らと待つ移動文庫やカンナ咲き
 朝顔に久しき雨や青深み
 風立ちぬ里に揺れゐるをみなへし
 水茄子や女将尚なほ艶な声
 挨拶を返す鸚鵡や夏の宿
 風変り今宵試しの温め酒
 みそ萩の紅それぞれに花の精
 カルメンを聴きつつ家路夏の星
 陶器市を素通り秋の五条坂
 けふも又猛暑の予報如何にせむ

土井久美子
 伊東和子
 中本吉信
 福本すみ子
 山本孝夫
 小澤菜美
 宮崎左智子
 鷺見たえ子
 山内夕力子
 国包澄子
 片岡久美子
 桂敦子
 山本丈夫
 吉田宏之
 高谷栄一
 谷口俊郎
 中井登喜子
 中井弘一
 中川すみ子
 難波篤直

銭洗ひ弁財天の秋の水
 絵筆とる池を満たせる紅の蓮
 炎天の仕事終へてのあづきバ
 越前に入りてうねりの青田かな
 恐々と蛇の行方を確かむる
 魁くる虫の音幽か厨より
 胡麻叩く黒き団ひに籠りけり
 秋灯下芭蕉一氣に読み下す
 潔ぎよきシンプルカツト秋の服
 香焚きて鶏頭の供花母偲ぶ
 花芙蓉五輪この目で見たきもの
 老夫婦庭に小ぶりの秋なすび
 水澄むや閑伽井の龍の勇ましき
 残鶯や一灯点る虚子の墓
 受付に人がゐなくて猫じゃらし
 無邪気なる児の擽りや猫じゃらし
 紳士めく男の日傘街を行く
 横文字の灯籠流れ太田川
 エプロンを掛けし釘あり袋蜘蛛
 満月はバナラ味かな帰り道

辻 香秀
 西垣 順子
 西村 敏子
 平井 紀夫
 能勢 栄子
 藤本 秀機
 松岡 和子
 松田 洋子
 三川美代子
 森田 利和
 山崎 真義
 山田 愛子
 渡部 法子
 大越 義雄
 大谷 信子
 大松 一枝
 小林 久子
 笹井 康夫
 佐用 圭子
 鈴木 江奈

琥珀集

佐渡の旅

川崎 利子

秋夕日おけさ流るる連絡船
鴉いろの秋夕焼や砂金採
新涼のおけさ手捌き足さばき
金山の遊女の愁ひ秋の雨
金山に眩く坑夫秋時雨
朱鷺もとめ旅する佐渡や稲筵
爽やかや船頭粹にたらい舟

遺跡野辺

大島みよし

甦る弥生期ロマン秋暑し
遺跡野へ辿る小径やねこじやし
今昔の命をつなぎ蝉時雨
遺跡野いま蝉万声に包まれて
古りし日を偲びつつ聞く蝉時雨
環濠の丘に遊べる赤とんぼ
弥生期へ光スリップ晩夏かな

秋の北海道

粟倉 昌子

星月夜最終便の到着す
大振の秋刀魚燻らせ炉端焼
遠目にも色づき初むるななかまど
新涼やクラーク像の髭はぬる（北海道大学二句）
誰もみぬ北大農場秋の雲
羊蹄山ようていの湧水巡る秋風裡
羊蹄山ようていの湧水旨し新豆腐

高千穂峽

橋本 靖子

豇 豆

竹内 悦子

樹々覆ふ朝霧深し高千穂峽

天孫の降臨の地や滝清き

夜神楽に降臨と見る盆の月

爆布くぐる權持つ男子輝きて

草千里烏帽子岳まで吹け南風

赤蜻蛉馬上の吾をかすめ飛ぶ

みはるかす牧草千里秋あかね

飛ぶ絨毯

鈴木 照子

鈴虫ファン

北尾章郎

丸刈りにして二学期の始まりぬ

飛ぶ絨毯あれば乗りたし秋の空

良夜なり児の書架占むる「どらえもん」

初紅葉翳す天空レストラン

滝壺に女人行者や葛垂るる

青春の匂ふ啄木夜長の書

一万歩を目差す今朝秋旅気分

中之島をオアシスとして鴉の子

去る人へ身をそよがせて猫じゃらし（曾爾高原3句）

一束の豇豆分け合ふ旅半ば

人を呼ぶさまに高原法師蟬

蕎麦の花見て逃げ出せるアレルギー

秋光の大観覧車ベトナムへ（びわ湖タワー）

新涼や食ひ初めの嬰の晴着きて

ドライブの終日飽かず雪解富士

学校のバケツリレーや早畑

銭湯の窓に実景富士涼し

夜の秋酒に煩き友と居て

唐もろこし齧る歯並の良き媼

新涼を交はず挨拶いとも好し

問合せ甕の鈴虫ファン増え

消火器

森下 康子

言はぬが花を忘れてしまふ猛暑かな

思ひやる心備はり休暇明

消火器の有り処確め防災日

割り算の合はぬ勘定秋の暮

台風の日や平穩を得たる刻

秋めくや地産野菜の種類増え

直系が集ひ経読む秋彼岸

虫の音

塩路 五郎

百歳の笑顔と握手敬老日

何故なぜと問うて迫る児小鳥来る

温め酒わが青春の唄古び

にはか雨骨董店へ赤とんぼ

蟪蛄の小首傾げてロダン貌

余命なきことを知らずや虫の声

虫の音のいまや弦楽多重奏

名 月

笠井 清佑

名月に影踏み遊び遠き日に

飛火野の草の匂ひの秋気かな

葛の花廃寺の跡に風奔る

灌壺に響く群青山を出す

山影を色淡く染め蕎麦の花

蕎麦の花やすやす風に揺るぎけり

尼寺の日向に咲ける曼珠沙華

鱚 雲

藤見佳楠子

燕去ぬ木造駅に巢を残し

休暇明活気戻れる無人駅

銀杏のはや色づける御堂筋

宙吊りのビルの窓拭き鱚雲

秋の宵湯の香の残る束ね髪

坪庭の日差し変はりて秋気配

一斉に灯るビル窓秋夕べ

金太郎鱈

伊藤 純子

敬老日

阪本 哲弘

小説に読み耽ける夜やつづれさせ

獲れとれの金太郎鱈海の色

葛城の畦の限りを曼珠沙華

爽やかやクルーズ船のティータム

秋天下デッキの風を深呼吸

初秋の風や山頂ハーブ園

水引や滝のしぶきを避けられず

湖族の里

坂上 香菜

とろろ汁

田中 浅子

蓑虫や芭蕉の訪へる浮御堂

静かなる湖族の里や白桔梗

スロージャズ流す料亭茸和

葭簣より洩るる秋の灯湖畔宿

句屏風に立子のサイン萩の風

俳友とかぼす酒酌めり爽やかに

おもひ草虚子と縁の俳句宿

菓飲む白湯なみなみと夜の秋

陶枕や浮かべる一句失念し

蝸のとよもす森を子と帰る

踏切を待つや西瓜を地に置きて

白日に歳偽れぬ案山子翁

歳とらぬ父祖一統へ門火焚く

ネクタイに手間取つてをり敬老日

唐門の雲龍の彫り秋立ちぬ

影連れて吹かれ飛びせる秋の蝶

聞き流すことも覚えてとろろ汁

笑ふたび口元隠す秋扇

見張り窓と抜け穴暑し陣屋跡

迎鐘響く余韻に妣の声

この秋思篋在す地獄絵図（小野篁）

瑠璃集

新豆腐

エプロンの木綿きりりと新豆腐
風の盆優しき雨を願ひつつ
丸眼鏡の父のアルバム走馬燈
相席の嬰のほほえみ竹の春
貰ひもの回し回され秋暑し

きりぎりす

考ふることの悲しき案山子かな
黒髪の愁思友達などいらぬ
秋うらら乙女は歴史習ひけり
雨の日の尾花芯まで濡れにけり
失業やきりぎりすには長き脚

和田森早苗

常田 創

満月

唐辛子の赤脳天を直撃す
古代魚の率いてゐたるうるこ雲
月光の帯にて我を束ねたき
たましひの歸りたがってゐる月見
満月の落ちればきつと弾みけり

吉田 希望

パラソル

二匹の蚊井戸端会議に顔を出し
パラソルの中の女優の澄める肌
本番と大声響く万緑裡
乗りてすぐ扇子広げる都電客
荘厳な鳥居夏空押し上ぐる

土井久美子

流星

日覆に地野菜並べ峽の駅
部屋深く射せる西日や子は嫁ぎ
三角関係彼と私と扇風機
陶枕に寝落ちて寧し母の里
流星や国なき民の神いづく

伊東 和子

十一月月号月評

塩路 隆子

遺跡野いま蟬万声に包まれて

大島よし

横浜にお住まいだから、関東近辺の遺跡を訪ねられた時の作品。最近特に実力を付けられた作者である。遺跡野はいま万の蟬の声に包まれ鎮もり返っている。古代と現代の融合、作者もまるで古代人になり切って蟬に耳を傾けている姿が見える。

鶉いろの秋夕焼や砂金採

川崎 利子

俳句や俳画の指導、いまもつて岸和田市を代表する高年者のバレーボールの選手として大阪府で優勝されるほどの任を果たされている。佐渡を訪られた連作の一句である。「鶉いろの夕焼け色」と「砂金採」をうまく詠み込まれ連想に砂金採りの姿や夕焼空を仰ぐ様子まで浮かぶ。流石ベテランの良い作品である。

大振りの秋刀魚燻らせ炬端焼

粟倉 昌子

よく海外を旅されて特別作品に発表されているが、その合間には国内旅行にも参加されている。北海道の旅された中の一句。筆者も煤けたランプのほの暗い炬端焼き

店に行った記憶があるが魚、玉蜀黍、馬鈴薯、アスパラなどすべて新鮮で美味しかった記憶が鮮明である。秋刀魚の時期、そりゃあ美味しかったことでしょう。臨場感溢れる句である。

みはるかす牧草千里秋あかね

橋本 靖子

子供孫さんたち総出の九州旅行であったようであるが伝わる。壮大な草千里のロケーションは抜群。句に流れるリズムがまた抜群。その視野の中には赤蜻蛉が気持ちよく浮遊しており眺めの遠近をうまく切り取った良い作品に仕上がっている。九州一連の句に筆者も一度訪れたい夜神楽の句など楽しませて頂いた。

良夜なり児の書架トむる「どらえもん」 鈴木 照子

近くにお住まいの孫さんだから平生よく行き来されており度々俳句に登場される。このときのお話に台風警報で休校になったとき、リュックに一杯「どらえもん」の本を詰めてやって来られたとか。どんなに大切にされているかを覗った次第である。良夜の月に照らされ坊やの部屋の窓から、どらえもんがこっそりと入って来る空想も宇宙好きの少年の夢かもしれない。

(以下略)